

2023 年度

# 下半期報告書



2023 年度冬合宿(黒部五郎岳山頂)

信州大学山岳会

## 目次

《プレ冬合宿》・・・p.3~

《冬合宿》・・・p.12~

《個人山行》・・・p.20~

### 10月

北ア 後立山縦走（敗退）

南ア 甲斐駒ヶ岳 鋸岳

北ア 錫杖岳 バードランド,ビーヤの大  
冒険

### 12月

北ア 爺ヶ岳 東尾根

北ア 唐松岳 八方尾根

北ア 大木場ノ辻 西尾地尾根

### 1月

頸城 昼闇山 北尾根

中ア 木曾駒ヶ岳 桂木場ルート

北ア 常念岳 東尾根

北ア 有明山周回

八ヶ岳 全山縦走

北ア 白馬乗鞍 BC

北ア 鍋倉山 BC

南ア 鳳凰三山・甲斐駒ヶ岳縦走

北ア 白谷山 BC

### 3月

奥秩父 一年縦走

北ア 乗鞍岳 BC

北ア 槍ヶ岳 中崎尾根

北ア 白馬岳 白馬主稜

《事故報告書》・・・p.36~

・ 鳳凰甲斐駒縦走における凍傷について  
の事故報告書

## プレ冬合宿

日程：12/1（金）～12/3（日）

メンバー：

会2 黒木(L)、椎屋、薛

会1 金子、亀井、木村、小嶋、田中、  
林、日比、森、吉田

OB 竹田さん

記録：

1日目 晴れのち曇り

9:05 アルプス平駅

10:35 地蔵の頭

14:10 小遠見山

14:40 テン場(小遠見山西側コル 1980m  
付近)

2日目 曇り

4:45 起床

6:25 テン場発

6:35～15:20 雪崩搜索訓練

(中遠見山東 2010m ピーク付近)

15:30 テン場着

3日目 曇り

4:45 起床

6:25 テン場発

6:30～7:30 弱層テスト

7:40～9:45 雪崩搜索訓練

10:10 テン場発

10:20 小遠見山

11:35 地蔵の頭

11:55 アルプス平駅

所感：

1 日目はアルプス平駅から入山して、大遠見山付近のテン場適地まで移動するとい

う計画であった。しかし、会1のワカンの不備や積雪量などが原因となってペースが上がらなかったため、小遠見山を越えた最初のコルをテン場とした。

2 日目はテン場から1つ中遠見山方面へ向かった先のコル北面で雪訓を行った。例年と比べて標高が低い訓練地ではあったが、積雪は十分であった。雪訓はクロスサーチ、シミュレーション、埋没訓練という順番で行った。会1の人数が多く、シミュレーションや埋没訓練には時間がかかったため、半数程度の会1が埋没訓練を終えたところで雪訓を切り上げた。

3 日目は埋没訓練の続きとシミュレーションを行った。雪訓後はテントを撤収し、下山を開始。2 日間で雪が降り積もったこともあり、トレースがなくなっていたため、下山でもラッセルには事欠かなかった。



反省：

会2

黒木

今回のプレ冬合宿は、私がリーダーとなって初めての冬山入山となった。上級生の人数に対して会1が多いという状況の中で、山岳会として合宿を行うことはとても難しかった。

まず行動に関しては、会1にとって初めてのワカン、初めてのラッセルとなり、ペースもバラバラであった。この時に上級生がどこに付き、どう動くかの意思疎通ができていなかった。また、一本中に体調のチェックをしていたが全体に対して聞いても上手く返答が返ってこないことが多かった。この対策として、一人一人に声をかけて確認するようにしたが、それも時間の関係で毎回このやり方はできなかった。全体に聞いても体調不良を言い出せるような環境を作っていかなければいけないと思った。次に、メットやピッケル、ワカンをつけるかどうかの指示を出すときに、1年生が考える時間を作ってあげることができていなかった。時間が押し押しだったこともあるが、考えることは時間を使ってでもやらせてあげなければいけないことだと思った。最後に歩行中のコールが少ないように感じた。尾根上を歩いているときに、先頭でラッセルしている人には危ないところを声がけしたが、全員に通っていなかったように思う。これはしっかりとコールするべきであった。

次に生活については、テントが3つだったこととまとめて張ることができなかったことで団装がどこにあって誰が管理しているのか把握できていなかった。具体的に言うと、スノーソー、スノーバーは各テントごとに管理できているのか、医療缶、ツェルトは各テントにあるのか、ここを把握できていなかった。夜になってから、医療缶がないテントがあることが分かった。これはテントに入る前に上級生が確認するべきだったと思った。

最後に雪訓について、まず反省しなければいけないことは、上級生の見本が見本に

なっていなかったことである。結果として一発で当たっていたのかはわからないが、ゾンデがタッパーを突き抜けてしまった。これは、初めに感触を確認しておくことで対策できたと思う。全体としては、時間をかっちり決めていたにもかかわらず、ズレが出てしまったことである。訓練だから、時間はきっちり行こうという話を何度もしていたのに、守れなかった。また、訓練なのに雰囲気は緩かった。来年に向けても、もっと上級生として締めるところは締められるようにしたいと思う。

合宿全体を通して、積雪量も多く、良い訓練ができたように感じる。ここから始まる冬山に向けてより一層気を引き締めて、全力で楽しんでいきたい。

係の反省

CL

全員を見て、上手く仕事を振り、全員で合宿を成功させなければいけなかったのに、自分がやりすぎてしまった。もっと仲間を信頼し、山岳会として合宿を作り上げていきたいと思う。

渉外

スキー場のゴンドラを動かしてもらうための連絡を取っていたが、合宿の二日前にスキー場が開いたので、状況が大きく変わった。雪は積もっていたが流石にオープンはないかなと思っていたが、オープンした場合としない場合のプランを立てておくべきだったと思った。

雪訓

上級生で何度も話し合いを重ねて計画を立ててきたが、不足部分も多かった。時間に関しては細かく決めていたが、少しずつずれていってしまった。係として率先して声

を上げるべきだったと感じた。

#### 椎屋

プレ冬合宿の反省として、第一に挙げられるのは上級生としての意思決定及び指導に関して力不足が過ぎたという事である。今回は雪があまり多くなく、隊の速度もあまり上げられないという環境下でテンバ及び訓練適地を探さなければなかった。その中で一度偵察に出るという場面があったのだが、偵察に時間がかかるだけでなく、より近い所にテンバ適地があるにも関わらず、そこは使えないと判断してしまった。隊があまり進まないという条件を踏まえれば、多少の狭さはあるとも近い場所を選択するというのは容易に思いついた筈である。自身を取り巻く環境や要素をしっかりと踏まえ、主観的な情報を可能な限り排し、客観的な判断を下せるよう努力していきたい。

指導に関しても、会1はこの程度なら分かっている、これぐらいは考えられるというある意味他力本願な思考を持ってしまっており、指導と呼べるものには程遠いものであった。指導対象が知っていようがまいが、自身の持つ情報は全て伝えるという意識を持たなければ後進を育てる事はできない。自身が指導した人間が困る事なく、さらに次の人間へ指導できるような教育をしていかなければならないという事を肝に銘じておきたい。

また、医療係としての反省として、これもまた周囲が見えていなかった事とさらに見えていてもまだ大丈夫と高をくくっていた事が挙げられる。まず周囲が見えていなかった事は以前からの課題であるため早急に改善する必要がある。高をくくっていた事

に関しては、それでは医療係の存在意義が無いので、たとえ無駄撃ちに終わろうとも、余計なお節介だと思われようとも積極的に体調確認をしなければならない。反省としては医療係の反省だが、上級生としての動きでも大切な事であるので、以降周囲を気かけ、積極的に関わっていきたいと思う。

全体として、数少ない上級生であるにも関わらずあまり戦力になっていなかった事は否定しがたい事実である。隊の一員として、上級生として、役に立てるよう精進していきたい。



#### 会1

##### 金子

本合宿では冬山での基本的な生活技術及び雪崩埋没者の救助方法を学んだ。今山行の反省事項を行動・雪訓・生活に分けて述べる。

第一に行動について。最も反省すべきなのは濡れへの意識の低さにより、体を冷や

してしまったことだ。例えば薄手の手袋 1 双しか着用していない状態で雪に触れ、手先を冷やした。下山するのに何日もかかるような山域で凍傷や低体温症にでもなると、命にかかわるという視点が欠如していた。また歩行技術も課題だ。トレースを崩したり滑って斜面を流されるようなことが多々あった。ほかには団装である赤旗を折ってしまった。個人装備ならともかく、この行為はパーティー全員にとっての危険にさらされたり不自由を強いられたりするリスクを高めたと思う。道具の扱いにはもっと気を使って大事にする。

第二に雪訓に関してである。間違ったところで素早さを気にして、重大なミスを犯しがちだった。例えばゾンデ棒が人とそれ以外にあたったときの感触の違いに気付かないことが多かった。埋没者と外界とのつながりはゾンデ棒しかないのだから、もっと感触に対して敏感になるべきだった。ほかにはクロスサーチの精度が安定せずにかえって時間を使うことがあった。また全体をとおして周りを見れていなさ過ぎた。埋没者の搬出路が乱れていても気づかなかったり、ビーコンサーチをしている人の足元の雪を削って体勢を崩させたりした。

最後に生活面の反省だ。上にも述べたが濡れへの意識が低い。テント内で派手に水をこぼしてしまった。せっかく快適に過ごそうと努力していたほかの人に申し訳ない。またエッセンや水づくりを進めるうえでの手順の組み立てを他の人に任せ、基本的に指示待ちだったのが反省として挙げられる。覚えていない流れはさっさと覚えて、疲れていたとしても主体的に参加するように心がける。荷物の整理も課題だ。使いたいもの

が行動中・テント内問わず取り出せる範囲になかったり、置場所を広くとったりした。道具の用途や使い時をよく考えるようにする。

## 亀井 生活

今回のプレ冬では、なかなか夏の行動を意識することができなかった。特に変わったところはなかったのに、以前と同様に行動が遅くなってしまうたり、荷物を端に寄せたりすることができなかった。また、紅茶作りなどは初めてだったが手間がかかってしまった。トイレに行く際に、手袋をつけ忘れる場面などがあった。自分の手を守るためにもしっかりとやろうと思った。

## 行動

初日は、ラッセルが多かったが、自分の体力不足によりなかなかラッセルはできなかった。かといって、ついていくことも難しかった。次回からは意識して、行動していきたい。サングラスを下にしまってしまったせいで、なかなか取り出せず、行動中目が痛くなってしまった。必要なものは上に置いておきたい。手袋をとって靴紐を縛ろうとして、手が凍傷しそうになってしまった。気をつけたい。ピッケルを持ってが逆になることが多い。疲れていると色々なことがなをざりになってしまっていた。これはしっかりと気をつけたい。命にも関わってしまうから。

## 雪訓

まずはやはりビーコンの使い方である。以前からあまり使い方がぎこちなかったのに、下界での練習をサボってしまった。多少使えるからこれでいいかでまたいつてしま



い、同じ結果を招いてしまった。機械系などは興味が持てないとなかなか上手くなれないため、しっかりと練習しようとも思った。仲間の命もかかっている。これを再確認すべきだと思った。ゾンデ棒も同じである。伸ばしたことはあったけれど具体的な使い方は、あまりわかっていなかった。また、しゃべるの使い方もあるが、確実にわかっていなかった。反省を書き、足りなかった部分が多かったと感じる。自分がうまくなって、怖いし、とても重かった。仲間が埋まってしまった時、疲れているかもしれないけれど、全力で掘り返し、声も大きくかけようと心から思った。こんな訓練の本番が来ないことを願いながら、しかしこの雪訓を忘れずに登山に励みたい

木村

初めての冬山で、夏とは全く趣が異なり、新たに覚えることも多く、そのリスクもやはり高いものだと感じた。

行動中の道具、衣類の着脱が多く、またオーバー手袋やテムレスでの操作にもなれず、全てに時間を要してしまった。慣れが必要なものもあると思うが、吹雪の中での使用を予め想定して準備しておくなどの工夫が必要だと感じた。また、ラッセル時にただがむしゃらに突き進むだけでは難しいと思った。今後の山行で自分にあった歩き方を模索しつつ、歩きやすいルート取りと後ろの人が歩きやすいトレース作りを心がけたい。生活では水作りや、紅茶など新たに覚えることが多く、今まで以上に周囲に気を配り流れを意識することが大切だと感じた。また、濡れに対する意識がとても低く、ものをこぼさないという意識の徹底を心がけたい。

プレ冬合宿で得た最大の学びは雪上訓練であろう。埋没者救出訓練では技術的な学びも多くあった。まずはプローブは何があっても抜かないこと。そもそもプローブをヒットさせることが難しかった。その精度を高めるために、ビーコンサーチでは可能な限り足場とビーコン周囲をならす。ゾンデを刺す際にはビーコンサーチでの水平面と垂直になっているかを慎重に確認する。ゾンデは雑に刺さずに両手の間を開けてしっかり持つ。ヒットしても他の埋蔵物との間違いを防ぐために、ビーコンとゾンデの数値が近いことを確認する、といった意識が必要だと感じた。今回の合宿では実際に自分も埋められ、救助する側にも回り、自分の行動一つで他者を危険に晒してしまうかもしれないことを身に染みて感じた。またリーダーとして指示をする場合もあったが、冷静になれずに判断を誤る場面もあった。一生懸命やるのはもちろんだが、その際も頭をきちんと整理して、適切に対処する難しさを感じた。今まで以上に教えられたことをただ覚えるだけではなく、なぜそうなるのかを考え、咄嗟にも使えるレベルに落とし込めるようにしたい。また、自分が上級生になるという実感も少し沸き、自分の行動にもっと責任を持つべきだと感じた。冬山ではリスク管理の重要性は上がるし、一方で自分独りでは山頂に立つのも難しい。お互いの信頼関係と責任が今後の山行の鍵になると思った。実力、知識ともに今の自分ではそれを全く満たしておらず、周囲から安心して一緒に山に行けると思われるよう、今後精進していきたい。

田中

今回のプレ冬合宿では埋没訓練や冬のテント生活など、新しく身につけることが多くあったが、その中で自身の技術や山に対する姿勢について多くの反省が見つかった。それら反省を行動、生活、雪訓の三項に分けて記す。

まず行動についての反省である。雪が付く、夏山とは全く異なる様相となった冬山を登るためには、夏山とは全く異なった体の動かし方や、装備を使用する技術が必要であるということを学んだ。体の動かし方ではラッセル時の効率的な体の動かし方や、ふらつかずにトレースを崩さない歩き方が挙げられる。ラッセル時の体の動かし方だが、足を股関節から外に回して目の雪上に接地するというものを教わった。また今回の山行で目立ったふらつきや、トレースを崩すなどの行為は自身の雪上歩行技術やわかんを履いた状態での歩行技術の稚拙さに起因するところがある。これについても正しい動かし方は教わったのだから、この先の山行を通して身につけていきたい。冬山に入って変わったものとして、装備の多さが挙げられる。これら装備を即座に切り替えて使用するという場面が多くあらわれる以上、切り替えに必要な時間は最小限に抑える必要がある。下界でも練習できる内容であるので、面倒くさがらず練習に励む。

次に生活についての反省である。生活についても行動と同じく、夏山とは比べ物にならないほどの新しい要素があった。それら生活の要素が増えたことに伴い、手順も装備も増えた。このような冬の生活の中で私が反省すべきことは、まず手順を覚えきれていなかったことである。手順を覚えきれていなかったがために先を見越して準備

をしておくことはできず、挙句の果てには朝の忙しい中無駄な作業をしてしまう始末であった。またテント内の個装や団装の位置を把握していなかったことも、生活に大きな支障をきたした。個装の位置の固定化などを通して、装備の位置をすべて把握して無駄のない生活を心掛ける。手順や装備に関する反省を挙げたが、生活における最大の反省は仲間との協力ができていなかったことであると考ええる。作業が多い冬の生活では気遣いも必要だが、それ以上に互いを頼って全体での最高効率を目指すことの方が重要である。

最後に雪訓の反省である。雪訓では雪崩に巻き込まれた仲間を救出するための様々な技術を学んだが、それらの技術は1秒でも早く要救を助け出すという意識のもとに成立しているのではないかと考えた。しかし、自分にはその意識が不十分だったのではないかと思ってしまう。訓練とはいえ、疲れた時にショベリングの手が鈍ってしまう、声掛けが途切れてしまう、このような事態は絶対にあってはならないことである。もちろん絶対に助けるという意識に固執しすぎて、救出リーダーの声が聞こえない、周囲の様子を冷静に俯瞰できない、クロスサーチの精度が悪いといった事態に陥ることは避けなければならない。しかし、自分にはそれ以前に助けるという意識がなかった。埋没した要救の苦しみは知っているはずであるのに、そのような状況でさえ自分に甘くなってしまう自分が心底情けない。精神面の反省が多くあったが、技術面でもまだまだ改善すべき点ばかりである。その中でも、救出中の個人での作業と協調すべき作業を両立する必要があると感じた。個人での作



業とは、クロスサーチや声掛けなど、協調すべき作業とは、ショベリングや全体を俯瞰する役割などである。自分の作業に集中することは重要であるが、必ずそれと同時進行で周囲を俯瞰しておく必要がある。熱意を持った救出と冷静な判断、自分の作業に集中することと仲間と協調すること、雪訓のみならず相反することを両立できるように訓練を積んでいく。

今回のプレ冬合宿では、冬山に入るうえで大前提となる様々な技術や知識を学んだ。この先の山行を通して自分の技術を確かなものにしていけるよう、励む。

## 日比

今回のプレ冬合宿では埋没訓練で冬山の怖さをテント生活や行動で冬山の楽しさを知ることができた。

生活では、プレ冬の前に覚えておくべきである生活の流れがところどころ抜けてしまっていて初日の水づくりで手間取ってしまい他のテントはエッセンを食べ始めているのに自分のテントは水を作っている最中であつた。プレ冬の前に生活の手順は完璧に覚えておくべきであつた、初週山行までには手順を完璧にしておこうと思う。また水づくりの時にコップェルから水が垂れ、火が消えてしまうことがあつたので今後繰り返さないようにこまめにコップェルについた水を拭くようにする。最後に生活全般の反省として次の行動が考えられていないため生活の効率が悪いということがあげられるため今後は常に次のことを考え快適な生活を送れるようにしていく。

行動では深いところでも膝上程度のラッセルであるのに進むのが遅く進んだ距離も

短かつたこれは体力不足からくるものである。これは夏からの課題でもあつたので早急に解決できるように取り組んでいこうと思う。トレースを追っていくときに前の人踏んだ所と少しずれたところを踏んでしまいトレースが崩れることがあつたので今後はトレースを崩さないように気を付けてトレースをたどっていくようにする。また先頭を歩いているときに自分のことで精いっぱい後ろの人が歩きにくいトレースを作ってしまったため、今後は後ろの人のことも考えて先頭を歩くようにする。

雪訓ではクロスサーチの精度が低く一度も一発でヒットさせることができなかった。クロスサーチをするときはクロスサーチをする面と動かす向きが直線であるかについて意識をする。またプロービングをするときはクロスサーチをしている人が指定した角度からブラさないようにスパイラルプロービングをするようにする。また掘り出しの際に掘り出すことに精いっぱいリーダーからの指示が聞こえてないことがあつた。今後は掘り出す際に全力で掘っていてもリーダーの指示は聞こえるような冷静さと余裕を持つようにする。

最後に雪山で絶対に雪崩に巻き込まれないように行動するという事を肝に銘じて冬山を楽しんでいこうと思う。

## 森

今回のプレ冬合宿の反省点を行動、生活、雪訓に分けてまとめていく。

まず行動についてだが、一番の反省点はワカンが道中でほどけてしまい隊の進行を遅らせてしまったことだ。準備段階でねじれないように結んでおけば防げたことだっ

たので、装備は丁寧に作ることを心がけたいと思った。また、雪上での歩行技術が足りていないことを痛感した。登りではラッセルの時にすぐに疲れてしまい、傾斜がきついところではなかなか前に進むことができなかった。下りではトレースを崩したり、転ぶことが何度もあった。これからの山行を通してワカンでの歩行技術を身に付けていきたいと思う。

次に生活についてだが、手順を覚えきれていなかったのも、次にやることを考えて行動することができなかった。二日目の朝の準備が遅れてしまったが、次にやることを考えて事前に準備するようにしていれば遅れることはなかったと思う。また、レーションをバラバラにして大スタッフバッグの中に入れたので、大スタッフバッグの中が散らかってしまい必要なものをすぐに取り出せなかった。次からレーションは一つの袋にまとめて入れようと思う。また、三日目のテント撤収後のパッキングが雑になってしまい、行動中とても歩きにくかった。急いでいたとしても、入れる順番を考えて丁寧にパッキングするべきだと感じた。

最後に雪訓についてだが、一秒でも早く埋まっている人のもとに駆けつけて救出するという意識が足りていなかったと感じた。特に掘り出しで先頭を交代した後に、最後尾で疲れから掘るスピードをゆるめてしまったことが一番の反省だ。埋没訓練で雪に埋まった時の苦しさを体験したので、掘り出しの時は要救助者の気持ちを考えながら行動するようにしたい。また、自分がリーダーとして掘り出しをしたときに、全体が見えておらず、指示が上手く出せなかった。リーダーをするときは焦らずに落ち着いて指

示を出すことを心がけたい。

上級生の皆様、合宿で指導していただきありがとうございました。

エッセン係の反省は、買う肉の量を間違えてしまったことだ。会計をする前の確認を怠らないようにしたい。

吉田

今回の合宿では、冬山の怖さを実感することができた。

生活についての1番の反省は、流れの把握ができていなかったことだ。紙面では確認していても、いざ実践となると、次に何をしなければいけないのか、あたふたしてしまった。朝、靴を履くのが遅かったこと、周りを見て鍋持ちを交代できなかったこと、パッキングが遅かったこと、な鍋持ちをしていない時に鍋の上で物の受け渡しをしてしまったことが具体的な反省である。また、連日雪だったこともあり、ガッシャーのバックルが凍っていて、うまく締めることができなかった。凍った状態で押し出す、息を吹きかけるなどして、素早いパッキングを心がける。

次に雪訓である。クロスサーチが正確ではなかったこと、ゾンデ棒をクロスサーチをした面に垂直にさせなかったことが原因で、なかなか一発でヒットさせることができなかった。初めての雪上で、凹凸のある面は技術や気遣いが必要だと実感した。また、ショベリングについても雪の流れをうまく作って、効率よく的に雪をかき出すことが難しかった。各々、先頭になった時にかき出しやすい方向が異なり、混乱してしまった。下界でできることは下界で練習し、もしものことがあった時にパニックにをを起こさな

いようにする。

最後に行動である。ワカンを履いた状態でスキー場で一步目を踏み出した時からふらつき、バランスが取れなくなってしまった。足は重たく緩い傾斜でもキツイと感じた。ラッセルも先頭では数歩しか歩けず、2番手の時点でとても息が上がってしまった。冬に必要とされる体力に自分が達していないことを深く実感した。ワカンを履くのが遅かったり、紐が凍ってしまった時にキツく結べなかった。また、ふらついたり、蹴り込みがうまくいかなかったり、トレースに真上から乗れなかったことが原因で、トレースを崩してしまうことが多々あった。そして最大の反省は、会の全体にインフルエンザをうつしてしまったことだ。日頃から体調管理をしっかりと、二度とこのようなことがないようにする。

今回の合宿ではたくさんの課題と、冬山・雪崩の恐ろしさを知ることができた。指導してくださった、竹田さん、上級生ありがとうございました。



## 冬合宿

日程：2023/12/29（金）～2024/1/4（木）

メンバー：

会2 黒木(L)

会1 金子、亀井、木村、小嶋、田中、  
日比、森、吉田

OB 塩谷さん、竹田さん

記録・所感：

1日目 曇りのち晴れ

7:15 駐車場出発

7:35 双六ダム

7:45 金木戸発電所

11:10 取り付き点

13:15 1331mP

14:25 池ノ尾山

14:50 テン場（1500m 付近）

1日目の行程は10kmの林道歩きから始まった。冬靴で歩いたのだが、林道歩きの中で会1の数人が靴擦れになった。取り付き点からしばらくは雪と藪の斜面であり、なかなかペースが上がらなかった。その後は明瞭な登山道が付いていた。

2日目 晴れ

4:30 起床

6:20 出発

6:50 1577mP

11:40 1955mP

15:15 テン場（2291mP 手前のピーク）

2日目の最初は藪との格闘であった。  
1955m までの登りがひどく、大きいガッシュと赤旗を持った会1は苦戦していた。  
1955m 付近では笹斜面の上に雪が付いて

おり、一步踏み出すたびに雪が崩れ落ちていた。膝下程度の寡雪であるが故の面倒くさいポイントである。それ以降は快適なラッセルのみの行程であり、樹林の隙間からは常に笠ヶ岳を臨むことができた。

3日目 雪

6:00 起床

9:10 出発

9:45 2291mP

11:20 テン場（2410m 付近）

3日目は悪天候が予想されていたので、午前中の疑似好天の隙をついて最終キャンプまで上げることにした。2日目のテン場付近では、尾根上の樹林を巻く必要があったが、尾根上に出てくる樹林としてはこれが最後となった。計画では最終キャンプは2480m 付近にする予定であったが、上がってみると風が強すぎたため、テン場は2400m 付近とした。

4日目 快晴

7:30 起床

9:05 出発

9:25 2480mP

10:30 2608mP

12:20 黒部五郎岳

13:10 2608mP

14:00 2480mP

14:10 テン場

4日目、元日にしてアタック日である。この日の行程は黒部五郎岳のピストン。全行程アタック装備で行った。前日の時点では早朝は天候が崩れる予報であったが、予報は外れ、最高の晴天に恵まれた。基本的に広い尾根であったが、所々細くなっている箇所

所では OB の方にスポットに入っていただくなどして通過した。登頂後、テン場まで戻ってきた後は、テン場横にテーブルと椅子を作り、夕日を眺めながら冬の外エッセンを楽しんだ。この外エッセン中に能登半島地震が発生。付近には特に影響はなかった。



5 日目 曇りのち晴れ

5:30 起床

7:10 出発

8:00 2291mP

14:00 テン場 (1955mP)

5 日目以降は下山するのみである。この先、行動不能レベルの荒天はない予報であったため、行程は急がずにルーファイなどを現役主体で行いつつ下山した。2 日目のテン場下の急斜面では、懸垂下降を行った。登りの際はクライムアップで登っているため、この懸垂下降が今山行唯一のロープ出しとなった。

6 日目 曇り

5:00 起床

6:30 出発

9:45 1577mP

10:30 池ノ尾山

11:20 1331mP

12:55 取り付き点

13:10 テン場 (1031m 地点付近)

6 日目も引き続き、現役が主体となつてのルーファイを行った。尾根上の岩などの巻き方、正しい尾根の選び方、学ぶことは多かった。時間的余裕はあったものの、下山後の反省会などを考慮し、翌朝下山することにした。

7 日目 雪

5:00 起床

6:15 出発

8:45 金木戸発電所

8:55 双六ダム

9:15 駐車場

7 日目、下山日。林道歩き 10km をこなして下山した。やはり、帰りの林道でも靴擦れを起こす会 1 はいた。林道では、地震によるものであろう真新しい落石の跡が多く見られた。

反省：

会 2

黒木

冬合宿は、会 2 が私のみでの入山となった。この決断をしたのは私である。これからの春休みの山行を考えると、会 2 の 2 人の体調回復を待ってから現役全員での入山を優先すべきであったかもしれないが、冬合宿成功を優先しての決断をした。

今合宿は椎屋、薛が参加できなかったことで、私と会 1 と OB の 11 人での入山となった。ここで私がしなければいけなかったことは、会 1 と協力して合宿を成功させることであった。しかし、私は 1 人だけでできるわけでもないのに自分一人でやろうと

して、結果すべてをこなせず OB に頼ってしまった。

細かい反省としては、登りの読図と状況把握からのルート取りが現役中心に行えなかったことである。藪が濃かったり、岩が出てきたりして尾根上を進めない際に、軽い偵察や判断を私と OB で行ってしまった。ここに会 1 も入れるべきであったと思う。また、テン場に着いてからの団装チェックも私がやってしまったが、会 1 にやってもらってもよかったと思う。また、最大のミスは、下りの岩を巻いた後に巻ききらずに隣の斜面に吸い寄せられてしまったことである。下りは現役中心で時間をかけて読図、ルーファイをしていたのに私を含め 9 人誰も戻り切れていないことに気が付かなかった。ここはもっと慎重にならなければいけなかったと感じている。そして、会 1 も違うと思ったらずぐに口を出せる雰囲気作りが必要だと思った。最後に会 1 に対してもっと細かく注意すべきであった。言うか迷っている間に OB の方に言わせてしまったことが何度かあった。気になったならすぐに言おうと思う。このためにはまず会 1 を観察しなければいけないし、ただ見るだけではいけない。だから、しっかり周りを見ながらでも歩荷し、歩ける体力と歩行技術をもっとつけたいと思う。

以上個人的な反省である。今合宿は、個人としても現役全体としても様々な反省が浮き彫りになったように思う。ここからの山行で同じミスを繰り返さないように、長期に向けて頑張りたい。7 日間も一緒に歩いてくれた塩谷さん、竹田さん、本当にありがとうございました。

係の反省

リーダー：リーダーとしての指示出しが少なかったと感じる。もっと細かい指示出しをしても良いと思った。

渉外：特に反省はない。

装備：テン場着後、団装のチェックをしたが、装備係はもともと薛だったので、会 1 にやってもらってもよかったと思う。

## 会 1

金子

本冬合宿は自分の未熟さを痛感したものになった。

特に体力面。歩荷により一日目から完全にばててしまい、ラッセルで使い物にならなかっただけでなく、前の人から離されてパーティーの進行を遅らせてしまった。今回ほどにヘタレたのは入部して間もなかった頃くらいしか経験がなく、自分は結構体力があるのではないかと最近思い始めていたが、全くそんなことはなかったようだ。もっと謙虚にトレーニングに励もうと思う。また疲れた状態で歩くことが多かったため、行動記録をとるための時間の確認や足の置き場、地形、観天望気などに対して行動中の意識が低かった。例えば枝にアイゼンの先をひっかけて頭から落ちかけたり、歩いてきたところのアップダウンや尾根の分岐などを覚えていなくて現在地を推定する材料にできなかったりした。疲れないための体力の底上げが一番だが、例えばたととしても集中を保ち続けられるよう努力する。ほかにはルーファイも課題だった。後から考えるともっと楽に歩けたと思えるところが多々ある。尾根線から無意識のうちに離れて現在地を見失ったりもした。OB の方から地形や地形図の見方・考え方に関して非常

に役に立つ助言をいくつもいただいたので忘れないようにする。

これまで体力の不足について多く述べてきたが、生活面での反省事項もちろんある。特に身体の状態に対してもっと神経質になるべきだと感じた。初日から靴擦れができたのだが、次の日も放置したおかげで痛みでどうにかかなりそうな時があった。必要な時にすぐ満足な治療が受けられるとは限らない山中では、小さな不調が生命に直結しかねないという認識が足りなかった。テント内の反省としては水づくりやエッセンの段取りを、ほかの人に全部立ててもらった日があったことが挙げられる。ほかにはものの管理が甘く、プラティパスを3日間なくした。貯めておける水の量の上限が少なくなり、テント内の作業に支障をきたした。

亀井

隣の人に行く

ハナストキニコールの忘れ

テントを吹くとき、雪のまま吹いていた

細かい気遣い3人テントの時、朝紅茶が沸いて軍手してる人がおろして、火を消せばいいのにわざわざ下ろしたあと軍手を取ってしまい時間を取られた。

全体的に行動が遅かった。次のことが考えられてない。1つ1つ遅い。自分がいるテントは朝出るのが少し遅かった気がする。

天気図 12月31日に天気図を書いたが、全くと言っていいほど成長していなかった。2週間前に1度書いて、その時も完璧ではなかったのに、練習をしなかった。今回の天馬は電波も繋がらなかったし、天気によっていろいろ変わってくるから、ほんとにや

らなければならなしここまでやってこなかったのはほんとにダメであった。行動歩行技術 トレイス崩す、蹴り込み浅く滑る

枝にひっかかる。木に引っかかったトレース 体力 登りはまじでキツすぎて無理だった、前の人についていくことと難しかった、ラッセルなどもってのほかだった。体力の問題は前からあって少しずつトレーニングしているから、継続していきたい。

ルーファイ 地形図を用いて歩くことができなかった。そもそも地形図の使い方がなっていなかった。コンパスの使い方もわかってない。先頭になっても歩くことで精一杯になってしまっていた。今回の合宿を通してみに沁みて分かった。

準備不足 アイゼン吐くのが遅い、ワカン吐くのが遅い、バックキングするのが遅い、これも毎回言われている。自分は準備が遅いと分かっているいい、先週の山行から帰って、ワカンを吐くのは練習していたが他が遅い。みんなを待たせてしまい凍傷のリスクに晒してしまったり、体の遅れをとってしまった。

行動中 理解していなのに返事してしまう

木村

今回の合宿においてはルーファイに関する学びが大きかった。

・尾根線を意識して歩く

障害物があり、巻く際にも尾根の線がどこにあるかを常に意識し、巻きはコンパクトに抑える。大幅に尾根から外れると、方向感覚を失いやすく、誤った尾根に入り込むリスクもある。斜面を面で捉えようとすると、地形図に現れない細かな起伏や尾根、谷



の影響を受けがちであるため、線で地形を把握することを心がける。

- ・地形図とコンパスからの情報はあくまで補助的なものに過ぎず、実際にその場で得られる情報の取得にも注力する。

今回の山行ではコンパス直進や、地形図からの予測を頼りにしすぎるあまり、かえってルーフアイを誤ってしまうことがあった。地形図とコンパス、その場の状況判断をうまく折り合わせられるようにしたい。

- ・尾根の東西南北のラインを意識し、最も歩きやすいと思われるルートを選択する。

尾根斜面の向く方角によって、日照や風の条件が全く異なり、植生や雪の状態も変化してくる。それを予想してライン取りを行い、効率的に歩けるようにする。

- ・予め歩くルートを地形図で確認し、ミスを起こしやすい場所を頭に入れて置いたり、先々に通るコースが見えた場合には歩きやすい場所はどこかを確認するなど、実際に歩く前の準備を充実させる。

- ・往路下山の場合は間違いやすい箇所を記録し、下山しにくい箇所の把握に努める。

- ・斜面上を歩く際にはなるべく木々の近くを歩く。ただし、ズボリそうな箇所はむやみやたらに突っ込まない。

行動中の反省としては急斜面を登っている際に前の人に詰め過ぎて、手をアイゼンで踏まれてしまった。藪が多くて上方に対する注意が欠けていたし、そもそも待ちが発生する際には安全な場所で待機するようにしたい。また、山頂へのアタック時に稜線に上がる前にバルクラバを装着しておらず、強風に煽られて顔がとても冷えてしまった。サングラスの着脱や、防寒テムレスとオーバー手袋の選択も含め、衣類や装備の着脱

判断は先々のことを予想して、早め早めに対処することを心がけたい。夏からの課題ではあるが歩行技術と歩荷力の不足を痛感した。下りで重心を前に移すのが早過ぎてトレースを崩してしまったり、足をおいた先の状況を感じ取る前に重心をうつしてしまったがために、ズボったり、枝に弾かれたりしてしまうことが多々あった。純粋な体力不足、また疲労時に注意力が散漫になるなど夏からの課題を再認識する場面が多かった。

テント生活では夏以上に先々のことを考えることが多くなり、また周囲にもっと気を配らなければいけないと感じた。夏に比べてやるべきこと、時間的な制約も多くなり、いかに快適なテント生活を送れるかが、特に長期の山行に入る上で鍵を握ると感じた。一方、山岳会への慣れと慢心からテント生活を営む上での基礎を蔑ろにしているとの指摘を受けた。確かに根拠をもったの簡略ではなく、面倒臭い、なんとなくといったために適当にしている部分が多いと痛感した。上級生になる上での心構えとしても、また山に入る上での基礎を大切にするという意味でもよくないことであるので、次回以降の山行では同じことを行わないようにしたい。

初めての冬合宿は天候にも恵まれ、無事に完遂することができた。薛さん、椎屋さん、林を欠いて、全員で行けなかったことは残念だが、山頂に立ち、無事に下山できたのは良かった。1月1日、あの黒部五郎岳の山頂から見たこの上ない光景は、新年を迎えるにしてはでき過ぎたものだった。一方で、自力で登ってきたという実感は乏しかった。天候が常に良好だったにも関わらず

ルーファイはミスるし、歩荷は全然できないし、ラッセルは全く進まなくて、前に行く竹田さんに突き放されるし、実力不足を夏以上に感じさせられた。

山頂から見えた穂高連峰がかっこよかった。いつか登ってみたいものだ。



#### 小嶋

行動：どうも私はガッシャーを下ろすと気が緩んでしまうようだ。アイゼンやワカンの装着は確かに手間のかかる作業ではあるが、急ごうとすれば作業時間は短縮できるものだった。つまり自分自身の心の弱さが原因であることは明白なので改善は容易いはずだ。これに限らず、個人の気の緩みは会全体に波及して怠惰な雰囲気を作り、後々の世代の事故を招くかもしれない。ただ逆も然りであるならば、個人の意識は全体の向上にも繋がるということだ。そう信じて、まずはアイゼンの素早い装着から始めたい。

生活：ションポリという概念がある。冬季夜間の野外排尿時の寒さに耐えかねた者が生み出したテクニックだ。これについては以前のプレ冬合宿で既に知っていたのだが、今回数多くのテント宿泊を繰り返すことでその有用性に気づかされた。夜間にテ

ント外へ出ることは、寒さ以前にまず面倒であり、時として仲間の睡眠を妨げてしまうこともある。そこでションポリの出番だ。事前に頑丈な容器を用意しておき、後はいつも通り排尿するだけ。このひと手間で自身は寒い思いをせず、仲間の安眠をも確保できるのだ。今回の冬合宿において、私は非常に頻繁にトイレに行っており、一晩に四度もテントを出ることすらあった。今後もそれは続くと考えられるため、次回山行からの導入を強く決意した。

#### 日比

今回の冬合宿では山頂を踏むことはできたが反省点が多く残る山行となった。

まず行動では体力不足が課題として挙げられる。特に二日目では団装を半分くらいバラしているのに腰の痛みと体力不足であまりペースを上げることができずテン場に着いた時には疲れ切ってしまっていた。ラッセルに関しては前の人々のラッセルが早い時はついていくのに必死で自分が先頭になるとときには疲れてしまい少ししかラッセルできなかったことがあった。一番手よりも二番手のほうが体力の消耗は少ないはずなのに疲れてしまっているということは前の人よりも圧倒的に体力が少ないということであるため、少しでも早く追いつけるように努力していく。また二目に腰の痛みからかなり早い段階で団装を半分バラしてしまい他のメンバーに迷惑をかけてしまった。腰の痛みは爺ヶ岳東尾根のときから山行の度に痛んでいたもので八全までには直すようにする。次に下山中にコンパスをなくしたこれは下界でコンパスにセルフを付けるという作業を怠ったために起きたことで

あり、このミスは遭難につながるため今後は下界で準備できることはすべてやろうと思う。下りでは主に現役で読図ルーファイをしたが、相談をする際にあまり自分の意見を言うことができなかったこれは自分の読図力やルーファイ力不足もあるが、他人に任せて後をついていけばいいだろうという人任せな考え方があったことは否めない。今後は人任せではなく積極的に自分から発言・行動し、読図やルーファイをするときには面ではなく線で地形をとらえ尾根線を意識していこうと思う。

次に生活ではレーションの予備を個別でパッキングしていて外側の人に個装を入れてもらう際に迷惑をかけてしまった。またテント内でもレーションが散らばり隣の人に迷惑をかけてしまった。今後はこまごましたものはスタッフバックにまとめるようにしようと思う。また朝出発するときの外個装が凍って時間がかかることがあったため、個装をまとめる前に雪や氷を落としておく、ズタ袋に入れて雪がつかないようにするなど工夫をしようと思う。

黒部五郎岳のピークに着いた瞬間の景色や感情、頂上で歌った春寂寥、頂上でのグータッチ、テント内での会話は忘れることはない。この合宿で得たものと明らかにした自分の課題を忘れず大切に今後山行に取り組み、4月から上級生として新たな会1が信頼できる人間になろうと思う。

最後に今まで指導してくださったOB・上級生の方々、共に頑張った同期に感謝します。

吉田

天候にも恵まれ、今回の合宿では冬山を存分に感じる事ができたと同時に課題もたくさん見つかった。

まずは生活について。自分でも日を重ねるごとに、生活を基本に則って行う意識が薄れているのを感じた。鍋持ちを片手で行う・軍手をしない・テント外で素手で過ごすなど。生活における事故を起こさないために気を張っていく。2日目の行動中にサングラスを紛失してしまった。ビブパンツの胸のところに掛けていたところ、気づいたらなくなっていた。その後はゴーグルで代用したが、装備が紛失しないように絶対に無くならないところにしよう。

そして行動について。アイゼンの紐に引っ掛かって転んでしまうことがあったり、ズボってしまったり、蹴り込みがうまくできず登りでは特に筐の上で滑る、下りではトレースを崩してしまうなど、歩行技術の未熟さを感じた。また、腰の不調や体力の無さで迷惑をかけた。少しぐらい体に不調が出ていても、「吉田なら歩ける！」と思ってもらえるくらい、強固な体力をつけなければと思った。そして、読図・ルーファイの難しさも改めてわかった。進むべき方向がわかっている時、顕著な尾根の上を歩いている時でさえ、どこが歩きやすいか、ズボラないかを考え足を出すのが難しかった。方向が決まっていない時には、地形図と眼前の景色を照らし合わせる事、コンパス直進、障害物を巻いた上で正しいルートに戻ることなど基本ながらも課題がたくさん見つかった。地形図から得られる情報を最大限取得し、さらに経験を積んで安全に冬山に入れるようにしたい。

今回の合宿では、冬山の素晴らしいとこ

ろをたくさん見れた。冬期には行って初めてピークを踏めたことも嬉しかった。しかし、引け目を感じることも多く、悔しい合宿ともなった。これから、知識や経験をつけて強くなって行きたい。



## 後立山縦走（敗退）

日程：10/7（土）

メンバー：

会2 薛(L)

会1 金子

記録：

1 日目 晴れ

5:00 扇沢駐車場スタート

5:30 駅見岬

7:00 2250m 地点

7:30 種池山荘

8:20 爺ヶ岳山頂引き返し

8:50 種池山荘

9:20 2250m 地点

10:00 駅見岬

10:30 駐車場

所感：

天気は種池山荘まで良かったがそこから上は、積雪があり、会1を連れて鹿島槍・五竜、白馬まで抜けるのは厳しいと判断し爺ヶ岳山頂で引き返した。柏原新道は相変わらず平坦で長い。



## 甲斐駒ヶ岳 鋸岳

日程：10/7（土）～10/9（月）

メンバー：

会2 黒木(L)

会1 田中、森

記録：

1 日目 快晴

7:45 尾白川溪谷駐車場

12:00 五合目小屋跡

12:45 七丈小屋

13:05 テン場

2 日目 曇りのち雨

2:30 起床

3:40 発

5:40 甲斐駒ヶ岳 5:55

7:10 六合目小屋

7:55 烏帽子岳分岐

9:20 中の川乗越

10:15 第2 高点

12:20 鹿の窓

13:35 鋸岳 13:55

14:50 三角点ピーク

16:15 横岳峠

17:50 ログハウス

3 日目 雨

6:00 起床

7:20 発

9:45 釜無川林道ゲート

所感：

1 日目は、車を回してから黒戸尾根を登った。天気は快晴だが、気温も高くならず歩きやすかった。

2 日目は、甲斐駒ヶ岳山頂で日の出を見て鋸岳に向かった。六合目小屋までは風上だったので寒かった。烏帽子岳との分岐でハーネスを履いて進んだ。大ギャップから鹿の窓の登りで2ピッチ分ロープを出した。その後の小ギャップでは、25m の懸垂と登りで10m 分ロープを出した。ロープを畳んでいる頃から雨が降り出した。下りはぬかるんでいて、特に横岳峠からの下りは滑りやすかった。ログハウスに着く前にはヘッテンを出した。

3 日目は雨のなか、林道を歩いて下山した。途中、何箇所か林道が崩れていて、川に下りて迂回した。



## 錫杖岳 バードランド,じーやの大冒険

日程：10/25（水）

メンバー：

会 2 黒木(L)

OB こうすけさん

記録：

1 日目 晴れ

6:15 槍見の湯前登山口

6:40 渡渉点

7:05 岩小屋

7:45 とりつき点

8:05 登攀開始

11:50 トップアウト

12:15 懸垂点

13:55 とりつき点

14:15 岩小屋

14:40 渡渉点

15:05 登山口

所感：

こうすけさんと、初めての錫杖に行った。天気が良く、穂高は綺麗に見えるし、ビレイしていても全く寒くないし最高だった。今回はオールナチプロで行ってみようということでバードランドを3ピッチ目まで登り、その後斜め下にトラバースしてじーやの大冒険の3,4ピッチ目を登った。登り切り後はコンテでつないで南方向に移動して3ルンゼの少し北の木から3ルンゼに向かって懸垂した。

登攀は私にとっては、ギリギリグレードだったので結構怖かった。特に核心だった2ピッチ目で少しルート取りがズレたところは、落ちはしなかったもののギリギリだった。基本はこうすけさんにリードをしてもらったが、バードランドからじーやに移るところはリードさせてもらった。ほとんどクライムダウンだったが、草が出ている



ところはクライミングシューズが滑り怖かった。このピッチの終了点のみ残置ハーケンを使わせていただいた。じーやに移ってからは3,4ピッチ目を一気に行ったが、チョックストーンを越えるところが怖かった。トップアウト後は少し移動し、木から60mダブルロープいっぱい3ピッチ分懸垂した。

今の時点では後輩を連れていけるルートではないが、4年までには連れていけるようになりたい。



## 爺ヶ岳東尾根

日程：12/9（土）～12/10（日）

メンバー：

会2 薛(L)  
会1 田中、日比  
OB 竹田さん

記録：

1日目 晴れ

6:55 駐車場

9:25 1756m

15:30 2200m 地点でテン場

2日目 晴れ

5:30 起床

6:30 テン場

6:45 2400m

7:40 山頂

8:55 テン場

9:45 テン出発

10:25 1978m

13:20 駐車場

所感：

全員で行くはずだった山行が1週間前のプレ冬でクラスターが発生し生き残った4人でラッセルを頑張った。東尾根の取り付きは急登なのでスリップに注意してほしい。東尾根に乗ると雪が少なかったのでやぶやぶしているので雪が多い時期がおすすめだ。

2400m地点から山頂まではまさにビクトリーロードだ。広い雪稜には誰も存在しない。強風に注意が必要だ。下山では冬山あるあるだが雪が少ないとコケまくるので雪が多いと下山しやすいのである。





## 八方尾根

日程：12/16（土）～12/17（日）

メンバー：

会2 黒木(L)、薛、椎屋

会1 金子、亀井、木村、小嶋、田中、  
日比、森、吉田

OB こうすけさん

記録：

1日目 曇り

11:20 八方尾根スキー場リフト最上部  
(1684m 付近)

11:55 八方池山荘

12:55 八方ケルン

13:05 八方池

14:45 2361m 西側の 2260m 付近

2日目 吹雪

4:45 起床

6:30 発

6:45 2361m 引き返し

7:00 テン場撤収開始

8:00 テン場発

9:10 八方池

9:20 八方ケルン

9:50 八方池山荘

10:10 八方尾根スキー場リフト最上部

所感：

天気が良くなかった。1 日目は入山前に雨が降っていた。薛が BOX にビーコンを忘れ、入山が大幅に遅れたことにより、テン場を上に進めることができなかった。リフトを降りた地点でワカンを履いて歩いた。

2 日目は起床時から吹雪だった。風が強く視界も悪かったためすぐに撤収する案もあったが、15 分歩いたキリのいいところで引き返した。戻ると分かった状態での進むという選択は、無駄といえば無駄かもしれないが、一年生にとってはこの環境で歩いたことはいい経験であった感じている。八方池付近からは風が収まってきた。全員の日出帽が凍っていた。八方池山荘を過ぎたあたりでリフトのアナウンスの音が聞こえ、やっと無事に帰れると実感した。



## 西尾地尾根

日程：12/23（土）～12/24（日）

メンバー：

会2 椎屋(L)、黒木、薛

会1 金子、亀井、木村、小嶋、田中、  
日比、森、吉田

OB 塩谷さん

記録：

1 日目 曇り

8:25 中尾高原口バス停

8:40 クリヤ谷ルート登山口

11:25 1270m 付近で体調不良にて薛下山  
開始

13:30 1512m 地点

16:20 西尾地尾根南側 1450m 付近にてテ  
ント設営

2 日目 晴れ

5:00 起床

6:10 アタック装備にて出発

8:25 1780m 付近にて西尾地尾根乗り上  
げ

9:45 1958m ピーク到達

10:05 出発

12:00 テン場到着

12:40 出発

14:05 クリヤ谷ルート登山口

所感：

一日目

入山前より薛は体調不良であったようだがリーダーがそれを把握せず入山。結果序盤で単独下山をさせる形となってしまった。その後もあまりペースが伸びず結果予定地よりも 500m ほど低い地点で泊まる事となった。隊としてのラッセル力の低さと読図山行らしい地形の掴みどころの少なさが相まった結果だろう。ラッセルは膝の高さ程度しかなく、樹林帯の中であったので読図以外は張り合いに欠ける初日となった。

二日目

大木場ノ辻への到達は時間的にほぼ不可能であったが引き返すのは勿体ないので行

ける所まで行くという方針で出発。標高が上がっても雪の量は大して変わらなかったが尾根への乗り上げの手前で斜度が上がり、ラッセルらしくなる。尾根に乗り上げてからは急に視界が開け、錫杖岳など北アルプスの錚々たる山々を眺める事ができた。特にテン場予定地であった 1958m 付近は槍ヶ岳、錫杖岳共によく見え、初日に到達できなかったのが悔やまれた。下山はテン場から尾根に戻る際のルーファイに少し手古摺ったものの、程よい雪の量と硬さで快適に下る事ができた。

総括

大局的なルーファイから目の前の斜面をどう上がるかまで様々な場面で判断力が必要とされるルートだった。残念ながら雪の量が少なく、下草で滑るなどはあったもののラッセルの大変さはあまりなく技術面に偏った山行となった。雪の多い時期に行けば違った景色が見られたのだろうか。今回の到達点より上はどのような景色が見られたのだろう。再挑戦する価値のあるルートである。



## 昼闇山

日程： 1/20（土）～1/21（日）

メンバー：

会2 黒木(L)、薛

会1 金子、亀井、木村、田中、吉田

OB 坂井さん

記録：

1日目 曇り

7:40 焼山温泉

8:40 林道分岐

10:05 尾根とりつき点

11:30 922m

11:55 950m 付近

2日目 雨

4:00 起床

5:25 発

5:30 922m

7:40 林道分岐

8:10 焼山温泉



所感：

ラッセルをしにこの山域の計画を出したが、時期が降雪に合わずラッセルはできなかった。尾根のとりつき直後は斜面が急で、雪もふわふわだったため登りにくかった。1日目の夜と2日目に雨が降ったことと、体調不良者が出たため、2日目は下山

のみとし、引き返した。下山は尾根通しではなく、922m ピークから北西に伸びる尾根を谷まで下りた。

## 木曽駒ヶ岳

日程： 1/27（土）～ 1/28（日）

メンバー：

会2 黒木(L)、薛、椎屋

会1 木村、田中、林、日比

記録：

1日目 晴れ

7:15 小黒川溪谷キャンプ場

7:50 桂小場登山口

9:15 1612m

10:30 1966m

11:10 大樽小屋

13:40 茶臼岳分岐

2日目 晴れ

5:00 起床

6:20 発

6:50 将基頭山

7:35 2730m

7:45 2661m

7:50 2700m 付近

8:05 2661m

8:25 2730m

8:35 将基頭山

8:50 テン場撤収

9:25 テン場発

10:20 大樽小屋

10:50 1966m

11:35 1612m

12:20 桂小場登山口

12:55 小黒川溪谷キャンプ場

所感：

2日間通して天気が良く気持ちよく歩くことができた。雪が少なく、登山口まではところどころ凍っていて歩きにくかった。登山道はガッツリトレースがついていて固まっていたため、逆に歩きづらかった。黒木が腰を痛め、歩きに支障をきたすほどとなってしまったため、途中で引き返すこととなった。



### 常念岳東尾根

日程：2/1（木）～2/2（金）

メンバー：

会2 椎屋(L)、黒木、薛

会1 金子、亀井、木村、小嶋、田中、  
林、日比、森、吉田

記録：

1日目 曇り

7:20 駐車場出発

8:25 東尾根取りつき

8:40 分岐目印の鉄塔下

9:30 黒木引き返し

9:50 1320m

12:30 1955m

13:00 テン場

2日目 晴れ

4:00 起床

5:10 出発

6:00 2178m

8:50 前常念岳

9:30 常念岳

10:25 前常念岳

11:50 2178m

12:20 テン場

14:10 出発

14:20 1955m

15:25 登山道分岐

17:30 駐車場



朝焼けと月と東尾根

所感：

一日目

入山前から黒木の体調不良は把握していたが、本人の意思とこれまでの活動を踏まえて入山を許可した。しかし西尾地の時と同じく序盤で黒木が単独下山する事となる。西尾地尾根の時と同じような状況を作り出してしまった事は大きな反省である。道中は雪が少ない上に積雪期の有名ルートである事も相まって踏み後が濃く、もはや夏山登山のような様相を呈していた。さすがに夏山と同様とまではいかないが、踏み後が幅 1m ほどの凍り付いた路面となっており、ルーファイ、ラッセル要素は皆無であり、雪山とは思えないのも確かだった。道の悪さは無かったものの、林の靴擦れが酷く、ペースを上げる事はできなかった。しかしそれでも予定地には辿りつくことができた。

二日目

樹林帯を抜けた後は風によりトレースが薄れており、多少は雪山らしさが戻ってきた。しかし依然雪は薄いままであり、ラッセル要素は無かった。しばらく快適に尾根上を歩いていたが、前常念岳を越えてからは風が強まり、主稜線に入ってから体は持っていかれそうなほどの強風となり、少し歩き応えが出てきた。東尾根からみる常念の斜面はとても雄大であり、美しいものだった。頂上からは穂高が雲に隠れる以外は眺望良好であったが、風が強く長居はできなかった。テン場に戻った時点で想定より早かったため、この日中に降りる事を決定した後残っていたエッセンを昼食とした。その後もアイゼン歩行で足が痛いなどはあったものの全体的には快調に歩き、下

山した。

総括：

序盤に若干デジャヴなアクシデントはあったものの予定を一日捲くペースで歩けた事は隊のメンタルや体調面に非常にプラスに働いただろう。しかしあまりに雪山要素が無く拍子抜けであった事は否めない。また同じルートを歩く事があれば是非トレースの無い雪の上を歩きたいものである。コンディションこそ最高ではなかったが、それを差し引いても冬の常念は見るにも登るにも非常によい山であった。

## 八ヶ岳全山縦走

日程：2/110（土）～2/13（火）

メンバー：

会 2 薛(L)、黒木、椎屋

会 1 金子、木村、田中、日比、森、吉田

記録・所感：

1 日目 晴れ

9:00 車出発

10:20 七合目登山口

12:05 蓼科山荘

12:50 蓼科山

14:50 大河原テンバ

出発が遅れ、大河原で 1 日目を終えた。

ばっちりトレースがあるので北八ヶ岳は迷うことはない

2 日目 晴れ

5:00 起床

6:15 出発



6:50 双子山

7:50 双子池ヒュッテ

11:40 北横岳

14:20 2300m 地点テンバ

双子池ヒュッテから天狗原の方の登山道は面白いが結構時間がかかる。北横岳は人混みがすごいので週末は避けるべし。

3 日目 晴れ

4:00 起床

5:20 出発

5:40 茶臼山

6:15 麦草ヒュッテ

7:20 丸山

9:30 中山

11:00 ミツダケ

12:40 夏沢峠

12:50 テンバ

この日も快調に進み、予定より先にテントを張ることができた。しかし、同日に丸山で滑落事故が発生している。道迷いには気をつけたい。

4 日目 晴れ

4:00 起床

5:20 出発

6:10 硫黄岳

6:40 硫黄岳山荘

7:50 引き返し

9:20 赤岳鉱泉

11:10 美濃戸口

4 日目はハケ岳が強風に晒された。会 1 の歩行技術に不安があったため硫黄岳山荘の少し先で引き返した。強風に対する歩行技術やそれに耐えるメンタルが必要だと実感した。あと少しで達成できるはずだった

のでまたリベンジしたい。



## 白馬乗鞍 BC

日程：2/16（金）

メンバー：

会 2 薛(L)、黒木

会 1 木村、森

OB 古賀さん

坂井さん

記録：

1 日目 天気

9:00 榑池スキー場 Gondola 終点

10:10 榑池自然公園

12:00 天狗原

12:30 天狗の裏コル

13:00 天狗原

14:30 榑池スキー場

所感：

カチカチの斜面だったが裏コルはいい感じのパウになっていた。天狗原も午後にはいい感じに融解して滑りやすかった。裏コルは滑りすぎると引き返すのに大変なので注意が必要だと感じた。

## 鍋倉山 BC

日程：2/17（土）

メンバー：

会2 薛(L)、黒木

会1 木村、森

OB 坂井さん、古賀さん

記録：

1日目 天気

5:30 駐車場

7:20 鍋倉山取り付き

10:00 鍋倉山山頂後、北斜面を繰り返し  
滑走

14:00 駐車場

所感：

例年に比べると雪が少ないが北斜面は藪が完全に埋まりゲレンデのような滑り心地。シール上りを練習するにはいい場所だった。



## 鳳凰三山・甲斐駒ヶ岳縦走

日程：2/23（金）～ 2/28（水）

メンバー：

会2 黒木(L)、椎屋

会1 金子、木村、小嶋、田中、林、日比、吉田

記録、所感：

1日目 曇りのち雪

7:50 夜叉神峠登山口

8:50 夜叉神峠小屋

10:50 杖立峠

12:55 蓼平

13:20 南御室小屋

体調不良によりメンバーが3人抜けた。椎屋と私の2人で7人見れるのか不安だが、行くしかない。今年度はここまで縦走を完遂できていなかったため、全員が最後の縦走で絶対に完遂するという強い気持ちで臨んだ。雪がちらついていたがとても暑かった。雪が少なく初めはツボ足で、途中からアイゼンを履いた。

2日目 晴れ

5:00 起床

6:15 発

6:50 2587m

7:40 砂払

7:55 薬師ヶ岳小屋

8:15 薬師ヶ岳

8:55 観音ヶ岳

10:40 赤抜沢ノ頭

10:45 地藏ヶ岳分岐

11:00 地藏ヶ岳

11:25 地藏ヶ岳分岐



13:10 高嶺

14:10 白鳳峠

天気が良く気持ちの良い稜線歩きだった。鳳凰三山を抜け、人の気配が一気になくなって楽しくなってきた。ワカンとアイゼンを履き替えながら進んだ。

### 3日目 雪

5:00 起床

6:20 発

6:55 赤薙沢ノ頭

8:00 広河原峠

8:45 早川尾根小屋

8:55 2463m

10:30 2553m 東の 2600m ピークからの下りフィックス開始

11:50 フィックス終了

12:00 2553m 東側コル

朝から雪が降っていた。この日通る予定のところでロープを出すかなと思っていた。予想通り少し悪い感じだった。後から考えるとスポットに入る程度でも良かったかもしれないが、上級生の人数が少ないことから、時間がかかることは全く気にしなかった。会1にハーネスを履かせ、フィックスの準備をさせている間に、椎谷がリード、黒木が肩がらみビレイでフィックスを張った。通過時は、ラッセルがないのに雪面にロープが張るという形になったため、歩きずらそうだった。ここでの通過に時間がかかったため、通過後すぐのコルをテン場とした。

### 4日目 快晴のち雪

5:00 起床

6:25 発

6:30 2553m

9:15 アサヨ峰

10:50 栗沢山

12:10 仙水峠

2553m 西側の 2700m ピークに乗り上げる前のトラバースで先頭が大変そうだった。2700m ピークに上がるところが雪崩れそうで怖かった。椎屋が写真を撮ろうとして小雪庇を踏み抜き斜面にダイブ。少し焦った。アサヨから先は景色は良かったが、風が強かった。栗沢山に登った段階で、積雪的に仙水峠にテントを張れるか微妙だったが、みんなで話し合い下りてみることにした。仙水峠東斜面の雪を削り、テン場とした。



### 5日目 曇り強風

4:00 起床

5:35 発

6:50 2536m

7:40 駒津峰

8:50 六方石

10:40 甲斐駒ヶ岳

13:20 七丈小屋

13:50 2262m

14:10 五合目(2130m 付近)

この日は甲斐駒に登り切り、安全圏まで下りなければいけなかったため、ヘッテンで出発した。朝焼けが綺麗だった。駒津峰を越えてから風がさらに強くなり、少しふら

つく人もいたが、積雪がある程度あり落ちる感じはしなかった。登り始めてからは視界が悪く、ほぼ現在地を把握できなかった。たまに見える摩利支天に伸びる稜線を見て大体の場所を把握して登った。常に強風で止まらなかったため、隊列が長くなっても風下まで行ってから隊列を縮めて再度進むことの繰り返しだった。甲斐駒からは部分的に悪いところにスポットを入ったり、クライムダウンしたりして下りた。無理して下りず明日の下山を目指して5合目で泊まった。

6日目 晴れ

5:00 起床

6:15 発

7:00 2049m

7:15 1881m

8:05 南側の駒ヶ岳神社との分岐

8:45 1048m

9:10 駒ヶ岳神社

9:25 尾白川溪谷キャンプ場

最終日はハシゴに時間がかかったものの、それ以外は踏み跡が明瞭だったため順調に下りることができた。今年度初の縦走完遂と冬山に現役のみで6日間という山行に全員が大きな達成感を感じたことだろう。



## 白谷山 BC

日程：2/29（木）～3/1（金）

メンバー：

会2 薛(L)、黒木

会1 金子、木村

記録：

1日目 晴れ

8:00 中の湯温泉駐車場

10:30 安房峠

11:30 安房平滑走

14:30 道路上にテン場

2日目 雪

5:00 起床

6:30 出発

8:00 中の湯温泉駐車場

所感：

初心者もありメンバーの力量的に白谷山を滑走するのは厳しいと判断し、シール登攀の練習をした。雪質が悪く、とても滑るのが難しかった。

2日目は、一晩で50センチほど積もり、登るのを諦めてソクサクと下山した。



## 奥秩父山脈 一年縦走

日程：3/7（木）～3/9（土）

メンバー：

会1 吉田(L)、金子、亀井、木村、小嶋、田中、日比、森

記録：

1日目 晴れのち雪

7:30 金峰山荘駐車場

7:35 登山口

11:00 2008m地点

13:55 小川山分岐

14:00 小川山山頂

14:05 小川山分岐

15:00 2347m シオザブノ頭

15:45 2290m地点

15:50 2240mテン場

2日目 晴れのち雪

4:30 起床

6:30 発

7:30 八丁平

8:35 大日岩

11:25 2317m地点

11:35 2595m地点

11:40 金峰山

13:40 朝日岳

14:05 2528m地点

14:30 朝日峠

15:15 2447m地点

15:25 大弛峠

15:30 大弛小屋

3日目 晴れ

6:00 起床

11:40 発

13:40 1918 地点

15:35 金峰山荘下の道路着



所感：

入山予定だった林が急遽愛媛に行かなくならなければならなかった関係で入山を二日間遅らせてのスタートだった。入山前は天気と降雪量的に予定していた行程よりも短い時間で縦走を行えるかもしれないと話合っていた。

一日目は終始ワカン歩行となったのだが、二日前からの降雪で想定より雪深かったこと、岩が出ており道が悪かったこともあり、小川山山頂まで時間がかかった。全く展望のない小川山山頂からは雲行きが怪しくなりはじめた。2290m地点ではピークから全面が切れておりルーファイにてこずったが、ピンクテープを発見し、登山道に復帰した。これまでの行程を考えて、当初予定していた大日岩まで行くことは諦め 2290m直下のコルにテントを張った。片方のテントでエッセン後に火器の調子が悪かった。

二日目は片方の火器の調子が悪い影響で出発までに二時間の時間を要した。八丁平の分岐からトレースが出始めた。稜線に出てから、危ない岩のラインに入ってしまった。金峰山についてから岩陰でワカンには

履き替え緩やかな稜線を歩いた。緩やかゆえにルーフアイが難しく、樹林帯に入るまで時間がかかった。2447m地点から先頭が大弛峠よりも北にそれてしまった。ピンクテープが北方面と東方面両方についており、地形図を確認するまで進んでしまった。火器の調子が悪かったこともあり、エッセンが終了したのは21:30を過ぎていた。前日、火器の調子がよかったテントと悪かったテントで情報共有ができておらず、火器が一台使えない状況は危険であるという判断の末、大弛峠から金峰山荘に下山することになった。

三日目は残っていたエッセンを食べてから出発した。大きく畝間がる道路を通らず谷沿いに下り、橋についた。そこから道路を使い、金峰山荘下の道路の合流地点に下山した。

火器一台という状況が一年縦走として危険であるか否かについて話し合いが行われたのだが、2日目に情報共有をしっかりとし、電波が入るうちに上級生に判断を仰いでおけばよかったと思う。



## 乗鞍 BC

日程： 3/10（日）

メンバー：

会2 黒木(L)、薛

記録：

1日目 晴れ

9:15 休暇村駐車場

10:25 Mt.乗鞍スノーリゾートリフト最上部

12:25 2610m 付近小屋

13:20 肩の小屋

13:40 折り返し

13:55 Mt.乗鞍スノーリゾートリフト最上部

14:05 休暇村駐車場

所感：

日曜だったため、人が多かった。前日から入り縦走を行う予定だったが、1日目の天候が悪かったため乗鞍岳のみとした。ハイクアップは急がずにのんびり行った。楽しく滑ることを目指して山行に臨んだため、アイゼンは持って行かなかった。肩の小屋から登り始めてすぐにアイスバーンとなったため、引き返した。朝日岳から北東



に伸びる尾根の南東の谷を落とした。ところどころパウダーで楽しかった。登りに4時間半かったが、下りは25分だった。やはりスキー下山は速い。

## 中崎尾根

日程： 3/11（月）～ 3/13（水）

メンバー：

会 2 黒木(L)、薛、椎屋

記録：

1 日目 晴れ

7:20 新穂高温泉第三駐車場

8:50 穂高平避難小屋

10:30 白出沢出合

12:20 滝谷避難小屋

14:05 槍平冬季小屋

2 日目 吹雪

沈殿

3 日目 雪のち曇り

1:00 起床

2:00 発

4:20 稜線

5:30 2388m

8:40 折り返し

10:50 槍平小屋着

13:30 槍平小屋発

15:00 滝谷避難小屋

17:15 白出沢出合

19:00 穂高平避難小屋

20:00 新穂高温泉第三駐車場



所感：

1 日目はとても天気が良く、歩いたら暑かった。途中でトレースは見えるが、微妙なラッセルになった個所があり、思ったより時間がかかった。

2 日目は天気が悪い予報で、降雪が多かった。大量降雪予報が出ていたため、全く動かず沈殿にした。

3 日目はアタックに時間がかかる予報だったためかなり早めの出発をした。前日に地形図を見てとりつき点を3人で共有していたが、ヘッテンの光が降雪に反射して周りが見えず現在地がほとんどわからなかった。ヘッテンで行動を開始したら、とりつき点にズレがあった。これはとりつき点に赤旗を立てていったが、下山時に見たら真隣の尾根がとりつきたい尾根だった。前日の明るいときにとりつき点に赤旗を立てておけばよかったと思う。稜線に乗り上げた後は、雪崩の連続だった。蹴り込むたびにビビりながら進んだ。最終的には中崎尾根から西鎌尾根に出る手前の2600m地点で岩の間を直登中に起きた15m×150mの規模、深さは最大40cmレベルの雪崩で、私と椎屋が怖くなってしまい、引き返した。下山は雪崩が怖かったが、自然誘発はないと判断し、早めに飛騨沢に下りて小屋に戻

った。小屋でエッセンを食べてから、撤収し下山した。下山はヘッテンになってから足が進まずしんどかった。またも同期山行を完遂できず悔しい。

## 白馬主稜

日程： 3/25（月）～ 3/26（火）

メンバー：

会 2 黒木(L)

OB 塩谷さん

記録：

1 日目 雨のち曇り

3:05 二股冬季ゲート

5:50 猿倉荘

6:45 とりつき

10:40 2237m

16:05 白馬岳

16:20 白馬岳発

16:25 白馬山荘

16:30 白馬頂上山荘

17:25 とりつき

18:10 テン場(長走沢出合付近)

2 日目 雨

4:30 起床

5:05 発

5:35 猿倉荘

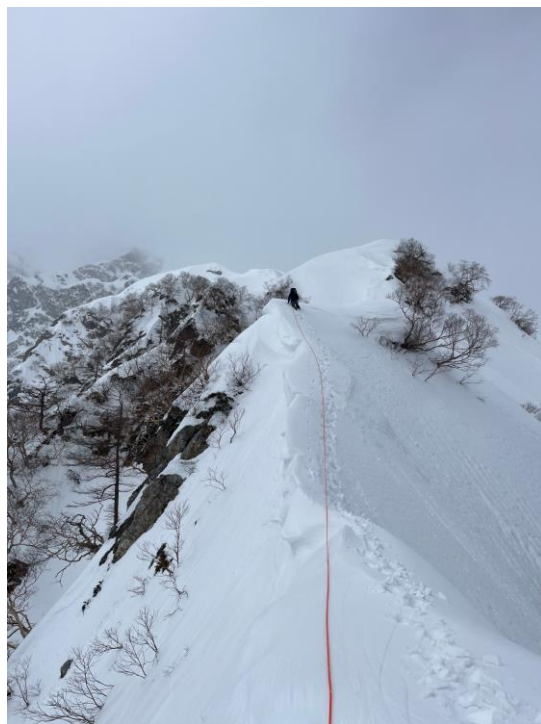
7:35 二股冬季ゲート

所感：

2 日目の天気が悪い予報が出ていたため、1 日目にアタックを行った。猿倉までの林道歩きが思ったよりも悪く、時間がかかった。とりつき後から小雨が降り、暑いのにヤッケを着なければいけない状態だっ

た。稜線は前日までに雪崩そうなところはすべて雪崩れた状態で雪崩の心配はほぼなかった。標高が上がってからは、アイゼンにコブができ、一歩ずつ落とさなければいけない雪質であった。2237m 付近からロープを出し、コンテで常に 60m 張った状態で歩いた。山頂直下の最後の斜面の一番下に一部岩が出ていて隙間に落ちそうで怖かった。山頂に出れた達成感は強かったが、トップアウト時点で歩き出しから 13 時間だったこともあり、うれしさより早くテントに入りたい気持ちが強かった。

2 日目は雨の中、下山した。短かったが雪質が歩きにくく、しんどかった。



## 鳳凰三山・甲斐駒ヶ岳縦走における凍傷についての事故報告書

文責：田中佑之介

### I. はじめに

鳳凰三山・甲斐駒ヶ岳縦走において2月27日に私、田中佑之介が凍傷になった。私個人の勝手な判断で報告する必要はないと考えていたため、仲間に問いただされるまで報告しなかった。そのため、事故が周知されることになったのは下山後3日が経った3月2日になった。軽度の凍傷ではあったが、報告を行わないという誤った自己判断を私が下してしまったという点も踏まえて、今後このようなことが起こらないようにこの事故報告書を作成する。

### II. 山行概要

期間：2024年2月23日～28日

メンバー：会2 黒木あおい(CL)、椎屋晴賀

会1 金子遊風、木村俊太郎、小嶋冴空、田中佑之介、林みつば、日比光彦、吉田沙瑛

行動記録：

1日目(2/23)	曇り	夜叉神峠駐車場～南御室小屋
2日目(2/24)	晴れ	南御室小屋～白鳳峠
3日目(2/25)	雪	白鳳峠～アサヨ峰の東 2553m 付近
4日目(2/26)	晴れ後雪	2553m 付近～仙水峠
5日目(2/27)	曇り後晴れ	仙水峠～黒戸尾根五合目小屋跡 【事故当日】
6日目(2/28)	晴れ	黒戸尾根五合目小屋跡～尾白川溪谷キャンプ場

5日目【事故当日】の行動記録

4:00 起床	8:50 六方石
5:35 仙水峠（発）	10:40 甲斐駒ヶ岳
6:50 2536m	13:20 七丈小屋
7:40 駒津峰	13:50 2262m
8:40 2752m	14:10 テント場2140m付近(五合目小屋跡)

※事故当日以外の詳細な記録は鳳凰三山・甲斐駒ヶ岳縦走の行動記録を参照していただきたい。



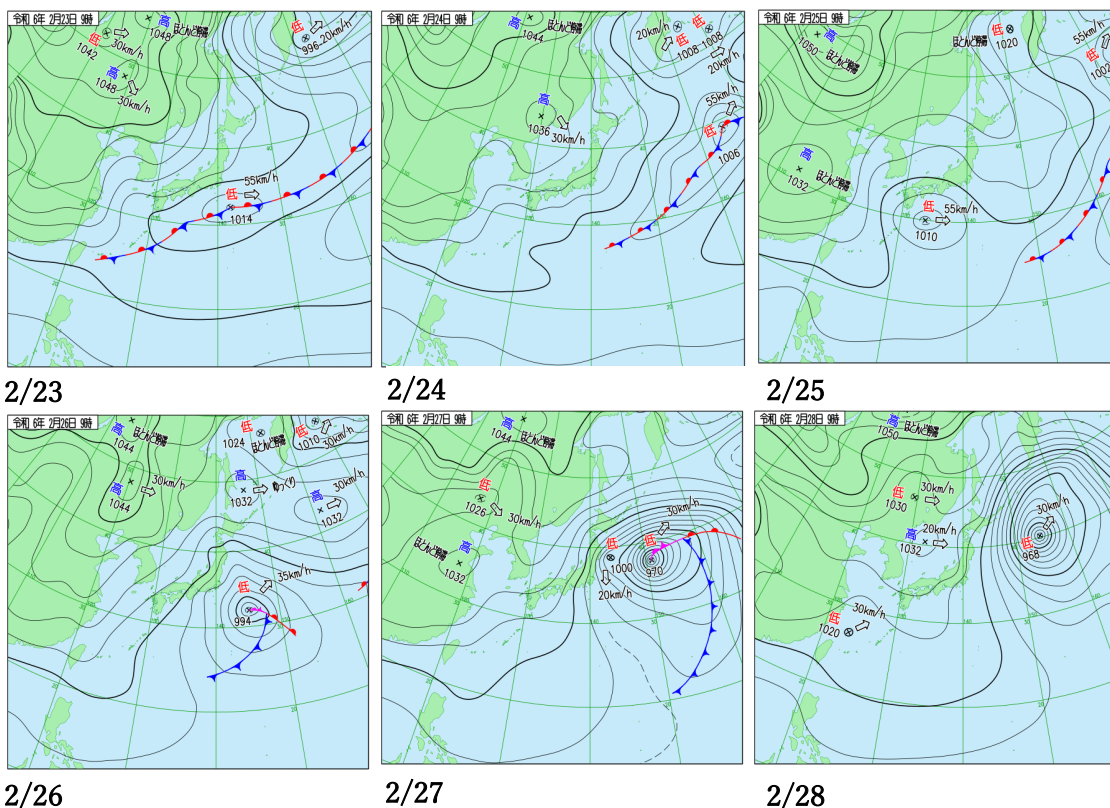
### Ⅲ. 事故の概要

事故者：田中佑之介(会1)

事故型：右手中指の先端部分の凍傷(Ⅱ度)

### Ⅳ. 山行期間の気象データ

天気図：



### Ⅴ. 凍傷に至るまで

山行期間中は特に強い寒波が来ていたわけではなく、気温、天候ともに比較的落ち着いていたといえる。事故前日は昼過ぎにはテン場に到着しており、テン場では指先に違和感はなかった。また、事故当日の朝の段階では衣服や薄手手袋、厚手手袋、防寒テムレスはすべて乾いていた。事故当日の気温は低くはなかったものの、稜線に出ると強風のため雪が飛ばされており、体感温度は低かった。

#### ●事故当日の行動

事故当日はヘッドンをつけての歩き出しとなった。仙水峠から駒津峰の区間は、その多くが樹林内であったため風も弱く、日が出てくると少し暑いほどであった。しかし駒津峰に近づくにつれて樹林が途切れて、駒津峰から先の稜線では強風にさらされることになった。そ

のため稜線上で一本を取ることも難しく、駒津峰でワカンからアイゼンに履き替えた後は甲斐駒ヶ岳山頂に至るまで 3 時間近く一本は取らずに進み続けた。駒津峰から六方石を過ぎたあたりまでは私が先頭で歩いたのだが、稜線上でも場所によっては雪が吹き溜っており、膝下程度ではあったがラッセルもあった。六方石より先では、私がルーフアイを誤ったため隊を一時停滞させてしまうことがあった。甲斐駒ヶ岳の山頂を踏んだ後は、黒戸尾根を下って五合目小屋跡を目指した。甲斐駒ヶ岳山頂を超えると風は弱まり、樹林帯に下るまでは 2 時間ほどかかったが、寒いと感じる場面はなかった。

行動時の特筆すべきポイントとしては、

- ・強風の中、稜線上を休まずに 3 時間近く行動し続けたこと
- ・その際に先頭を歩き、軽いラッセルを行ったこと
- ・稜線上で一時停滞することがあった点

が挙げられる。

#### ●凍傷に気が付くまで

事故当日は特に駒津峰から先の稜線を歩いている際に寒さを感じた。駒津峰までの登りや稜線上でのラッセルで汗をかいてしまっていたことが凍傷の原因になったと考えられる。稜線上では指先に違和感はなく、むしろ強風に直に晒されていた顔面の方が寒さを感じていた。テントに入ってから指先に少し違和感があったが、他に異常はなかった。そのため処置は何も施さず、翌日下山した。下山した翌日から指先に弱い痺れが生じはじめ、右手中指の指先に水泡が確認されるようになった。これによって、凍傷と判断した。

## VI. 医師の診察内容、症状の変化

### 診察結果

- 3/4 ・おそらく、これ以上悪化することはない。
- ・体質的に血液循環が悪く、末端が冷えやすい。
  - ・3/7 から入山する予定があるが、その際は防寒防水において細心の注意を払い、血行を促進する塗布薬、漢方薬を必ず服用すること。
- ⇒血行促進の塗布薬、漢方薬の処方

### 経過状況

- 2/28 右手中指の指先に違和感がある
- 2/29 指先に弱い痺れがある、水泡が生じる
- 3/1 水泡が日を追うごとに大きくなり、硬くなる
- 3/2 上級生に凍傷について初めて報告する
- クライミングを行ったこともあり、水泡は割れなかったものの小さくなり、さらに硬くなった

3/4 はたクリニックへ診察を受けに行く

この頃から水疱は柔らかくなり、小さくなっていった

また指先の痺れや違和感もなくなった

3/8 山行中に水疱が割れる

割れた水疱の下には既に柔らかい皮膚が形成されていたが、患部には触れないようにして放置した

3/11 水疱上の皮膚が完全にはがれる

この頃には水疱下の皮膚もある程度硬い皮膚になっていた

ここまで、全期間において痛みは全くなかった

## VII. 事故原因・反省点

### 【事故の原因】

- ・駒津峰までの登りや、稜線上のラッセルによる発汗
- ・駒津峰山頂における衣類調整の際に薄手手袋を濡らしてしまった可能性
- ・ルーフアイミスによる稜線上での停滞
- ・一本をとれる機会が少なかったため、レーションや紅茶をあまりとっていなかった
- ・他の日と比べて標高が高い地点での行動時間が長かったことによる酸素不足（血行の抑制）
- ・緊張感を感じる稜線歩きを行ったことによる血管の収縮

### 【事故の反省点】

#### 凍傷後の対処について

- ・何よりも先に上級生に報告すべきであった。今回は下山日の前日に凍傷になったということで凍傷の悪化は避けられたが、行程がさらに続くのであれば凍傷の悪化は避けられない。しかし、私は同期に指摘されるまで上級生に報告するつもりなど毛頭なく、隠しているつもりであった。絶対に報告しなければならない。
- ・上級生の指示を受けてから危機感をもって、医者にかかったこと。正直に言って凍傷を軽く見すぎていた。軽度の症状でも、さらに悪化する可能性をはらんでいることを念頭に置き、事態を重く受け止めるべきであった。
- ・水疱ができているにもかかわらず、クライミングをして指先を酷使したこと。今回は幸運にも水疱が割れるという事態は起きなかったが、むやみに患部を動かすべきではなかった。

#### 凍傷前の予防について

- ・汗をかいてしまう前に、衣類を適宜調整する。そのための停滞を遠慮してはならない。
- ・手袋の着脱の際になるべく薄手手袋は外側に出さない。

- ・手袋以外の着脱についても、体の風下側で防水の処理などを行う。
- ・ニトリル手袋などの着用を検討する。
- ・稜線に出るなど、その後長時間にわたって一本を取れない可能性がある場合は、その前に長めに一本を取り、レーションや水分を多めにとっておく。
- ・ピッケルを持っている側の手、持っていない側の手に関わらず手指を動かして末端まで血を行き渡らせる。
- ・事前に自分の体質について理解しておき、自分が陥りやすいリスクを把握しておく。その上で意識的に対策を講じておく。

## VIII. 事故者の言葉

今回私が犯してしまったミスは大きく2つある。1つ目は凍傷になったこと。凍傷を防ぐ方法は多く存在しており、いくつかの方法は知っていたにもかかわらず、甘く見てこれといった有効な対策を講じていなかった。2つ目のミスは上級生への報告を怠ったことである。凍傷に関わらず、自身の不調を上級生に報告するということは、少なからず上級生に面倒を見てもらっているという側面のある下級生としての最低限の義務である。リスクを甘く見積もっていたこと、また下級生としての最低限の義務さえも怠ってしまったことは、自身に対する甘さであり、何とかなるだろうという慢心であったように思う。このような甘さや慢心が実際に事故を引き起こし、さらに場合によってはより悪い結果に至る可能性が大にあった。このことを理解することができたのは、今回の事故を通して私が得た最も価値のある学びである。これまで幾度となく自身の甘さと慢心に気付く機会があったが、私は今回の事故を起こしてしまうまで、この初歩的な学びを全く理解していなかった。

この先、私は上級生として下級生とともに山に入る機会が多くなる。この時期に自身への戒めを得ることができたのは寧ろ幸運であったのかもしれない。このような事故を経験したからには、自身の精神、技術、知識、体力のレベルについて正確に把握し、更なる向上を目指し続ける。そのうえで下級生と接していく。

山に入っていく中で各人の心のうちに甘さや慢心がないか、自問し続けなければならない。私は事故を起こしてしまうまでその重大性に気づいていなかったが、事故が起こってしまったからでは遅すぎるのである。絶対に事故を起こさないといいた漠然とした覚悟ではなく、隙のない精神、正しい技術や知識、十分な体力を持っていなければならない。

田中佑之介